

---

# ドラゴンクエストV 天空のスライム？

ロクロク

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ドラゴンクエストⅤ 天空のスライム？

### 【NZコード】

N9575W

### 【作者名】

ロクロク

### 【あらすじ】

カボチ村の村人に頼まれ、リョカは西のある洞窟のモンスターを狩りに行つた。

そこで出会つたのはかつての仲間と奇妙なスライムだった。

この小説は作者がもう一つの小説に行き詰まつたときに投稿する、不定期更新の小説です。

しかも作者はまだ書き始めてから日が浅いです・・・・・・  
なので出来ればアドバイスを下さると嬉しいです・・・・・・

この小説は綺麗に完結した本編が地味に崩壊する予定です。  
特に特定のキャラの性格が少し悪くなる可能性があります . . . .

ドラクエ5を汚されたくないという方は絶対に見ないでください！  
！！

・・・・・ どんな結末でも大丈夫 とこ方のみ先にお進みく  
ださい・・・・・

## 01 (龍書丸)

私の他の小説を読んでくださっている方、  
「めんなさい！！！」

s i d e リュカ

「……に村を襲っている魔物がいるのかな……」

僕は力ボチ村の人達に頼まれて、  
西の方から来る頭に青いものを乗せたトラのようなモンスターを倒  
しに来た。

どうやらそのモンスターは週に数回、  
夜に現れ、村で育てている食べ物を奪っているらしい。

それだけならまだ分かるんだけど、  
そのモンスターは村の人を襲つたことが無いらしい。

・・・・・生活のために村の食べ物を食べているだけかもしだ  
いけど、  
村の人たちも困っているんだ。

それに不本意だけどお金も貰つてるんだから、  
僕はそのモンスターを倒さなきゃいけない……

真っ暗な洞ぐつの中、僕の馬……パトリシアが馬車を引いて洞ぐつ  
内を移動していた。

僕の隣には少しだけ鎧びた剣……銅の剣を装備した、スライムナイ  
トのピエールが  
周りを警戒していた。

彼はラインハットに向かう途中に出会った魔物だ。

初めこそはお互いに剣を向け、戦つたが、  
その戦いの中で彼は僕のことを気に入ってくれたらしく、  
僕の仲間になつてくれた。

そんなピールの後ろを飛んでいるのが、ホイミスライムのホイミンだ。

ホイミンは確かラーの鏡を手に入れる途中に出会った氣がするがあり覚えていない。

気が付いたら仲間になっていた。という感じだ。

僕たちはこの三人パーティーで行動している。

僕とピールが全線で戦い、ホイミンが補助、という感じに。

先程も現れたさまざまの相手に僕とピールのコンビネーションで倒した所だ。

「リュカ殿。本当にここに村を襲っている魔物がいるのでしょうか？」

ピールが僕に質問してきた。

ピールは魔物でありながら人の言葉を話せる賢い魔物なのだ。

「村の人からの話じゃ、ここにいるのは確かにはずだよ？」

僕がそう言つと、ピエールはそうですかと納得してくれて、前に進んで行つた。

僕も馬車を引きながら、ピエールが先に行つて確認してくれた道を進んでいった。

洞ぐつの中にかなり深い所まできたと実感できる所まで行くと、  
どうやら、魔物の巣らしき洞穴があつた。

僕とピエールはゆっくりとその洞穴をくぐった。

「ガルルルルー！！

洞穴の中心にいたトラの魔物……キラーパンサーが雄たけびを上げ  
てきた。

まさか村を襲っていた魔物がキラーパンサーだつたなんて……

……キラーパンサーは地獄の番犬と呼ばれるほど凶悪な魔物のはず  
だ。

それなのに今まで村に被害者が出てないなんて……

「リュカ殿！――！」

ピエールの声に反応して顔を上げてみると、そこにほんの少しひに向か  
つて飛びかかる  
キラーパンサーの姿が目に入った。

「くつ――！」

僕は腰に差していた銅の剣を抜くと、

それをキラーパンサーに向けて横に薙ぎ払った。

だがキラーパンサーはそれを爪ではじくと、その勢いを利用して後ろに飛んだ。

僕はキラーパンサーの強さに驚いたが、それ以上にキラーパンサーの後ろの岩に刺さっていた剣を見て驚いた。

あれは父さんの剣！――！  
どうしてこんなところ……！まさか！？

「リュカ殿！――！」

僕はピールの叫び声を聞き、不意に横にジャンプした。

先程までいた場所をキラーパンサーは横切ってきた。

「リュカ殿！ 戦闘中に考え方ではないでくださいー！」

「……ピール。今からこの戦いに手を出さないでくれないか？」

ピールは僕の言葉に疑問を持つて質問してこうとしたが、僕の真剣な目を見ると、ゆっくりと剣を鞘にしまい、洞穴の外へと向かった。

「……ボロングー…！ 僕だ！ リュカだよー！」

そつとうとキラーパンサーは一瞬動きを止めた。  
やつぱりあのキラーパンサーはボロンゴーなんだ！

キラーパンサーは警戒するよつこいつを見つめていた。  
あと一歩で何かを思つてくれやうだ……何かないか！  
ボロンゴーとの思つ出の品は……

僕はバッグの中身を必死に探した。  
そしてあるものを見つけた。

「……ボロングー。これ覚えていないか？」

僕はそう言つながらやつぱりとコボンをかざした。

これは昔、友達がボロンゴーにヒップレゼントしてくれたリボンだ。

キラーパンサーはゆっくりと近づくとコボンのにおいをかぎ始めた。  
そして急に驚いたような表情をした。

なにか思い出したようだ！

キラーパンサーが殺氣をなくしてやつぱり近づいてきて、僕の前  
まで来ると、  
急に顔を舐めはじめた！

やつぱりボロソゴだつたんだね！

「フニアー」

ボロソゴは先ほどまでの威嚇するような声じゃなく、甘えるような声でそう言つてきた。

そしてじばりく僕が頭を撫でていると、急に父の剣らしきものの方へ歩いていき、それを大事そうに持つてきた。

……この紋章はやつぱり父のものだ！！

僕はそれを受け取ると銅の剣を袋にしまい、父の剣を腰に差した。

「フニアー。ハロハロハロ……」

ボロソゴはさう声を出すと僕の足元まで戻ってきた。  
どうやら付いてきてくれるようだ。

僕は洞穴から出て、外にいるホールたちと合流した。

洞窟の出口付近まで来たあと、急に横を歩いていたボロンゴが動きを止めた。

「どうしたの？ ボロンゴ？」

僕達はボロンゴが見つめている先を見つめた。  
そこには全身が青色の小さな魔物・・・・・スライムが僕たちを見下ろしていた。

「ガルル！」

ボロンゴがスライムに向かって吠えた。  
その声は先ほどのように敵意を含む声ではなかつた。

「……そうか。主人と出会えたか」

僕たちは突然の出来事に驚いた！ スライムが人間の言葉を話したのだ！

話せる魔物は少なくはないがこの世界に存在する……  
現にピエールは人間の言葉を話すことが出来る。  
それなのになぜ驚いたかというと、  
スライムの声があまりにクールな声だったからだ。  
見た目のギャップ差のせいで必要以上に驚いてしまつた。

僕がそりやつて思考の世界に入っていると再びボロンゴが呟えた。

「……一緒に行こうだと？」

「お前、知ってるだろ？ 僕が人間が嫌いなことを……」

スライムの言葉からしてどうやらボロンゴはスライムを仲間に誘つたようだ。

……勝手に仲間を増やされるのは困るけど、彼はボロンゴの友達みたいだし、

話せる魔物がピールだけじゃ寂しいのも事実だから、  
僕も彼を勧誘するのに手を貸した。

「こらにちは！ 僕はリュカ。ボロンゴの友達を！……君は？」

「……俺は見ての通りスライムだ。……名前はない……」

スライムはさつきボロンゴと話していた時とは違い、  
敵意を含めた鋭い瞳で僕を睨んでいた。

……さつきは下から見下ろされてたから分からなかつたけど、  
このスライムはかなり田つきが鋭い。

僕はスライムの敵意に押されながらも、質問をした。

「……君はボロンゴとまじうこう関係なの？ 友達？」

「……こいつとはそんな関係ではない。十年ぐらい前にこいつが

魔物も狩れずに一人弱つて倒れているところを助けて、

戦い方を教えてただけだ。

……まあその剣を守るように戦っていたから、

狩れないのも無理はないがな」

「……どうやらボロンゴを助けえてたみたいだ。

ボロンゴが父さんの剣をそこまで大切に扱ってくれてたなんて……

「……ボロンゴを助けてくれてありがとう」

「……勘違いするなよ？

俺はこいつが魔物の癖に別の魔物に襲われている子供を助けたのを見て、

「こいつに興味を持ったからこいつと一緒にいただけだ」

スライムはそう言いながら視線を後ろのピエールたちに向かた。

その様子はまるで何せお前らが人間といふんだという意味を持つた目だった。

「……お前らはどうして人間なんかと一緒にいるんだ？」

「私はアベル殿と直接剣を交えることでアベル殿が悪い人間でないことが分かった！」

だから私はリュカ殿に付いていく決心をつけたのだ！」

「……つまり自分より強いそいつがいい奴だったから付いて行つて  
るってことか？」

「左様……」

スライムは大きく息を吸い込み、大きなため息を付いた。

「……お前は言葉が足りなくて分かりずらい。  
それでお前もこいつと同じ理由か？」

スライムの質問に対してもホイミンは答えずにただゆらゆらとしていた。

……ホイミンてまさかあれで会話してるのかな……いやそんなはず  
はない！  
そんなはずは……

「……へえ～……お前の理由はまともだな」

スライムが感心したようにそう言つた。

嘘！？ 本当にあれで会話してるの！？

僕が驚いているのをスライムは無視して今度は僕のバックを見つめ

た。

するとスライムの額がピクリとなつたのに僕は気付いた。

「……おい！」

スライムが僕に質問してきた。

だがその様子は先ほどまでは違ひ、何かを見ざめている様子だつた。

「……お前はビビりして旅をしている？」

なぜか僕は本当のことと言わなくてはならない気がした。

……まあ、もともと質問されたら誰にでも答えるつもりだったけど

……

「……僕は魔界に連れて行かれた母を助けるため、

魔界に行くため……魔界の魔王を倒すため伝説の勇者を探してゐる

！」

「……人間が魔王に勝てるとでも思つてゐるのか？

もちろん伝説の勇者も所詮は人間……

そんな人間が魔王に挑むだと？」

「……確かに魔王は強大だ。……人間の力じゃ敵わないかもしけな

い……

でも、僕は止まるわけにはいかないんだ！

……父の遺志を無駄にするわけにはいかないんだ……

僕が一気にそいつと、スライムは眼を閉じて何かを考え始めた。そしてゆっくりと目を開けると少しだけ口元を緩ませて言った。

「……人間が魔王に勝てるかどうか、それを見届けるのも悪くはない。

……いいだろ？、お前に付いて行こう。……だが、おれは戦わないからな？

だから邪魔になつたらいつでもメンバーから外すといい……」

スライムがそいつと僕を見つめてきた。

その瞳はどうするんだ？と僕に尋ねている気がした。

「…………分かった。よろしくね？　ええっと……スラお……！」

「…………変な呼び名はやめて欲しいんだが……」

こつして僕たちのパーティーにスラお（非戦闘メンバー）が仲間になった。



## 02 (前書き)

この前書きのを忘れていましたが、  
リュカの袋はゲームと同じ、何でも入る袋です！  
  
この小説は詰まつた時に書いたつと思つてしまつたが、  
もう一つの小説とできるだけわざりばんこに書いたつが、  
どうもはかどるかな？  
と、思い始めました・・・・・

sideスラお

・・・・俺は今、

カボチ村の前で止まっているパトリシアの馬車の中でアイツりを待つていた。

どうやらアイツはこの村の人間にボロンゴを狩るように依頼されたみたいだ。

だがアイツはそのキラーパンサーを連れて村に入つていった。

恐らくキラーパンサーとグルだつたと思われるのが関の山だろ

う……

まあ、たとえボロンゴを村に連れて行かなくても、  
そのことは先程目撃されていたようだから、  
連れて行くに關してはどううりでも良かつたが……

おー、どうやら帰つてきたようだな……

sideout

「金はどうなったんだ?」

僕が村から出て馬車に近づくとスラおが顔をだして尋ねてきた。

「……何か言う前にお金を渡され、  
せつさと出て行けって言われたよ……」

村の人の殆どはボロンゴを怖がった顔で見たり、僕を憎むよつな目  
をしていた……  
確かにボロンゴが村を襲っていたのは事実だけど、  
あんな態度は……

「……村人の態度が気に入らないって顔をしてるぞ?」

スラおが僕の心を見透かすよつにそつ言つてきた。

「村人がお前にとつた態度は当然の行為だ。  
お前は村を襲つた魔物を倒すように依頼されていた。  
それなのにその魔物を連れ、さらに仲良く歩いている光景を  
見られたんだ。  
当然の反応だろうが……」

……確かにスラおの言ひ方とおりだ……

村の人にとってボロソゴは恐怖の対象なんだ……  
それと仲良く歩いているのをみられたら誰でもそういう反応をする  
よね……

「……それでこれからどうするんだ?」

スラおが話を変えるよひにそひ言ひてきた。  
……気を使つてくれてるのかな?

「次はとつあえず新しい村か、町に行つて、情報を集めよひと思つ  
てるんだ」

「……で、その目的地は?」

うつ! 痛いところを付くな……

何時も次の目的地は新しい村か町で場所を調べて、向かつていたん  
だ。

……でも今回は情報を教えてくれそうな雰囲気じゃなかつたからな

……

僕がそりやつて考え込んでいると、スラおは大きくため息を吐いて  
言った。

「……ポートセルミの西にルラフーンといった、少し大きめな町がある……

次に情報を集めるならそこが適任だろう。……」

「そういう事はリュカ殿が決めるのだ！ そなたが決めることではない！！！」

スラおの言葉にピールがそう言った。

……僕を立ててくれるのはうれしいけど、それよりもっと仲良くしてほしいな……

「なら次はそのルラフーンに向かおう。ピールもそれでいい？」

「……リュカ殿が決めたのなら私はどこへでも……」

「なら決まりだね。それとピールはスラおと仲良くなること。スラおは町のことを教えてくれてありがとう。」

「……戦わない代わりに情報を提供しただけだ。まあ特価交換みたいなものだから気にするな」

スラおはさう言つと、馬車の中へと戻つていった。

……スリムは戦いが苦手なのかな？

「よーし。ルラフロンに出発だーー！」

僕はそのままアーヴィングの前に立ち、歩き始めた……

「……ここがルラフーンか……」

スラのおの言ひ通り、ポートセラミの西に大きな町があった。

「……確かに大きな町ですね……」

少しだけ怒った声でペーパーはそう言つた。

「……やつきの事、まだ怒ってるのかな？」

「ここに来る途中に魔物が襲つてきて、僕たちを囮んだとき、スラおは全く気にせずに馬車の中に居たことを……」

「……スラおは初めから戦わないって言つてたじゃないか……。  
それにボロンゴが加わったことで、  
前衛が増えて、戦いやすくなつたんだから、ちようど一こいじやない？」

戦闘はボロンゴのおかげでかなり戦いやすくなつた。  
僕とピエールとボロンゴが接近で戦つて、  
傷を負つたら後ろにいるホイミンが回復。  
……うん！ いいコンビネーションだ！

「とつあえずスリムせりのよひにペトリシアと町の外で留め置く  
だから、

僕たち四人で町を詮索しよう！」

僕がそう言つと、ピエールたちは頷いてくれた。  
よーし！ 絶対に情報を手に入れるぞ！！！

総丈は情報を手に入れると!!

「……なぜなら、なんだー？」

「リュカ殿。いつちばつき、通りましたよ……」

あれから僕は迷ってしまった。町の中で……

「…………」

「…………」

…………この町はとても迷っちゃう……！

こんなに迷うのは僕はじめてやない！ 町のせいだ……！

僕はあれから数十分かけてほぼ町の全てを回った。

後は……

「…………」が呪文を研究しているおじいちゃんの家かな？

「…………」が呪文を研究しているおじいちゃんがいるところをがある。

僕がこの町を探索して知ったことの一つは、元々

変な呪文を研究しているおじいさんがいるところをがある。

僕はその呪文に興味を持ち、そのおじさんに会いに来たのだ。

コンコンー！

……反応が無い

コンコンー！

……反応が無い

コンコンー！

「あれ？ 留守なのかな……」

僕がそう言しながらドアノブを回した。

ガチャ！

「あれ？ 鍵がしまってないぞ？」

僕はそのままドアを開けた。

……その先に目に入ったのは大きなツボと、そこから吹き出す不思

議な煙だつた。

……そしてそのツボの近くに本を持ちながらツボを見たり本を見たりと来る返しているおじいさんだつた。

僕はおじいさんをボーッと見ていると、僕気が付いたのか、おじいさんが僕の元に歩いてきて言つた。

「なんじゃ お前さんは？」

お前さんも煙たいとか文句を言いに来たのか？」「

僕はその質問にすぐ首を振つた。

「すると わしの研究を見学に来たわけだな。  
なかなか感心な奴だ」

おじいさんはうとうと頭を下げながらうつてきました。

「もし 研究が成功すれば

古い呪文がひとつ復活することになるじゃね？

「古い呪文ですか？」

「つむ。それは知つてゐる場所であれば

瞬く間に移動できるところだいそうな呪文じやー！」

「それはすごい呪文ですね！！」

僕がそうやつて褒めるとおじこれんはうれしくなったのか僕に提案をしてきた。

「アーリー」

この研究を手伝ってみたいと思わぬか?」

「いいんですか!?」

「構わぬ構わぬ！  
よし！」

それでほねじ」としておられ!」

「はい！！！」

僕はそう返事をし、走って階段を駆け上るおじいさんの後を追いかけた。

二階に上ると、おじいさんは机の方に向かい、そこに広げてある地図を見て言った。

「ちよつとい」の地図を見てくれ

僕はおじいさんの言つ通り、地図をみた。

「今、わしらがこの山野が」じや  
「

おじこれとせんざつ言ひて町を一つ指差した。

「でな、」のあたりにルラムーン草とこののが生えてくる。ここに  
じや

おじこれとせんざつ言ひて町を一つ指差した。

「……それだけで本当に呪文を覚える」とが出来るんですか?」

「ああ! 必ずじや!

だからわしはお前らが取つてくらうぞ! 繰る!」

おじこれとせんざつ言ひて、ベジタの方へ歩こんだり、そして布団の中に入ってしまった。

…………  
えい

### 03 (前書き)

テストが終わりそうなので、こつちも投稿してみました。・・・  
リュカの性格がおかしいかもせんが、  
作者のリュカはこんな性格です！  
・・・・意見があれば書いてもらえたと嬉しいです。・・・・

## sideリュカ

僕は取り合えずおじさんのはづとおり、ルラムーン草といつ草を取りに行くことにした。

…………馬車までの道のつばべホールが先導してくれた。

「ん？…………すいぶんと遅かったな？」

スラおが睨むようにひきつてきた。

「じ、情報とかを聞いたり、装備を整えたりしてたんだよー。」

僕はスラおに悟られないようにそう誤魔化した。

…………これなら迷ったなんて思われない…………

「…………まさか迷つていただけ、とかは無いよな？」

ギクー！

「や、そんなはずが有るわけがないだろー！」

まさか一瞬で見破られるなんて……

ど、どうじよつー… これ以上の誤魔化しは無理……

「…………まあ、そんなことはどうでもいい……  
何か情報は手に入れられたのか？ お前の欲しい情報とか

「…………それはなかつたけど、呪文を教えてもらえることになつたよー」

「呪文？」

「…………街に住んでいる」老体が呪文の研究をしているらしく、  
それをアベル殿が手伝うことでの呪文を教えてくれるらしい」

スラおの疑問にピエールが答えた。

「…………ピエールも少しだけスラおと仲良くしようとしてくれ  
ているんだね！」

「…………ふん…………それでその教えてもうえる呪文とはどんな呪文だ  
？」

「えっと、確か、知っている場所なら何処へでも行ける、  
古代の呪文だよ」

「…………何処へでも飛べる古代の呪文ね……

それでその呪文を教えてもらつ条件とはなんだ？」

「……から西に生えているルーなんとか草つていつ草を持つしていく  
ことだよ」

「……草の名前は長すぎて忘れたけど、まあ、草の名前なんでどうでも  
もここよねー」

「……じゃあこれからそのルーなんとか草つて草を探りに行くのか  
?」

「うん……」

……けど、呪文を教えてくれるっていう人がなんか胡散臭いからも  
しかしたら  
古代の呪文なんて嘘なのかしれないんだよね……  
まあ、草を探つてきたら分かることか!  

「……なら俺は先程のように馬車で待機しておくから。  
まあ頑張れよ~」

「うおはやう」と馬車の中へと入つていった。

それを見て、怒りの声を上げよつとしていたピエールをなだめて、  
僕たちはおじいさんが地図で描した場所へ向かつて歩き出した……

迫りくる魔物を倒しながら僕たちは西へと進んでいった。

道中には大きな滝があつて、

大きく遠回りすることになつたが、

やつとおじいさんが地図で指した場所までたどり着くことが出来た。

「……やつと着いたよ……さて、おじいさんが言つていた草は……  
ああーーーー！」

「……どうしたんですか！？ リュカ殿ーー！」

そう大声を上げながらピエールは僕に近づいてきた。  
ボロンゴもホイミンも同じように僕の足元に来て、  
心配そうな表情で僕を見つめてくれた。

でも、僕は今、大きな失敗をしたことに気が付き、  
土下座するように地面にひれ伏していた。

「……おじさん、どんな草か聞くのを忘れていた……」

「……あ……」

僕の舌葉にピエールは腑抜けたような声を出した。

「　　」

辺りに氣まぐれの空氣が流れれる。

僕やピエールは勿論、ボロンゴやホイモンも話せまじないが、今、声を出しぬべて空氣になつてこむ」とは分かつたよつだ……

「……どうしたんだよ、大きな声なんかを上げて

『氣まぐれの空氣を知つてか知らずか、馬車の方からそんな声が聞こえてきた。

「……それがね、スラお。

呪文を教えてくれるおじさん、どんな草を探つてくれるかを聞いていないんだ。

……聞いたのは草の名前だけだ……」

本気で失敗した。

まさかこんなことになるなんて……

「…………それでどうするんだ？」

「一端その爺の所に帰るのか？」

それが、この辺に生えている草を全部採るか？

……それとも呪文は諦めて、旅を再開するか？」

「…………おじこわんの所に一端帰ることにするよ。」

「…………まあ、草のこととを聞かなかつた僕も悪いしね。  
面倒だけど、一端おじこわんの所に帰るか……」

「…………お前の旅の目的は母を助けるため……魔王を倒すために  
伝説の勇者を探すことだらうが。

こんな所で足止めを食らつてもいいのか？」

「…………確かにこの場所に来るの、歩き続けて2・3日へりこかかつた。

往復したらそれなりに時間が掛かってしまうだらう……でも……  
今やりせりふと約束しちやつたしね。

「…………おじこわんと約束しちやつたしね。」

「リュカ殿……」

「……」

僕がそう言つと、ピエールは尊敬するよつた眼差しを僕に向けてきた。

……その眼はちよつとやめて欲しい……

スラおは僕をジッと見ていた。

僕もムツとスラおを見つめた。

そうするとスラおは大きなため息を付いた。

……失礼だな！

「……今回なお前の真つ直ぐな心に免じて、  
俺も手を貸してやるつ……『ラナルータ！…』

スラおが突然呪文を唱えた。

……ラナルータって？

「……ラナルータとは確か、一定の地域の昼と夜を一時的に反転させる呪文！

今使つて何の意味があるというのだ……

それにこの呪文は確かに失われた呪文！！

スライムが使える呪文ではないはずだ……

……なるほど、そんな呪文なんだ。

でも、確かに今その呪文を使う意味が分からない……

「……ねえ。

今その呪文を使ってどんな意味があるの?」

「……見ていればわかる……」

スラおはそう言つて馬車の中へと戻つていった  
空はどんどん青から黒へと変わつていった……

そして空が黒に染まつた瞬間、  
足元に生えている草から薄い光が放たれ始めた。

「……これは…?……」

ピールはそこまで言つと黙り込んでしまつた。

……無理もない。こんなものを見せられたら誰だつて黙る。

「……きれいだ」

足元……辺りで薄く光っていた草から空に上がるよつに光の球が上  
がつていた。

それはまるで他の世界の「ひのき」の世のものとは思えないような光景だった。

その光はさりに光を放つたり、薄くなったりと繰り返し、  
より一層、幻想的な景色へとなっていた。

その光はまるで小さな月のよう、「て」、真っ暗な場所を光で輝かせていた。

「……その光を放っている草がルナムーン草だ」

馬車の中からポツンとそんな声が聞こえてきた。

「……そつとと採れよ。

夜が明ければ、ただの草と、ルラムーン草の見分けがつかなくな  
る……」

スラおがそう言つてきたので僕は取りあえず、光を放つ草……ルナ  
ムーン草を探り、  
バックへと詰め込んだ。

そして僕とペエール、ボロンゴとホイミンはラナルータの効果が解  
けるまで、

その光景をジッと見つめていた……

### 03 (後書き)

ラナルータの効果を変更しました。

さすがにいつでも昼夜変更するのはあまりにも現実的におかしいので・・・・・

だって、この呪文は確か、ドラキーでも使えるんだよ！？

そんな簡単に使って、世界中の昼夜を変更するのは酷すぎます！突然朝から夜に変えられるのは困ります！

・・・・・なので勝手に効果を変えさせてもらいました・・・・・

## 04 (前書き)

久しぶりの更新です！

メインの小説も落ち着いてきたので、  
これからは二つの小説も出来るだけ更新したいと思します！

## sideリュカ

僕達はラナルータの効果が切れると、お爺さんにルー……薬渡すべく、これまでの道のりを戻っていた。途中でモンスターにも何度も襲われたが、スラおは一度も戦闘に参加することは無かつた。

「…………」またピエールがスラおに怒る……  
そう思つてゆつくりとピエールの顔をチラ見した。

…………だけどそこにはいつもなら絶対に怒つている筈のピエールが表情も変えずに剣を鞘に閉まっていた。

「…………ねえ、ピエール。…………スラおに怒つてないの？」

僕は不思議に思つてピエールに尋ねた。

「…………怒つてはいます！！！  
…………しかし、前ほどは怒つてはいないのかも知れませんね…………」  
「…………どうして？」

「…………彼が先程使つた呪文……ラタルータの事は先程説明しましたね？  
…………あの呪文は失われし呪文……いえ、古の呪文です。  
…………いじえ

……それをビリして彼が使えるかは分かりません

確かに昔に無くなつた呪文をビリしてスラおが使えるんだらう

呪文を使えた、「先祖様の血を受け継いでいるのかな?

それともお爺さんと同じで、研究して覚えたのかな?

「…………しかし古代の呪文と言つてもあの呪文は戦闘で使っても何の意味もあつません。

実は彼は本当に戦つのは苦手なんでは、と思い始めたのです」

「うーん……どうなのかな?

一様、ボロボロの事を鍛えてくれてたらしくから、弱いわけではないと思つけど……」

実際ボロボロの戦いからは昔に比べてすこし良くなつてるからね! 距離の取り方とか、引くタイミングとか……

「…………まあ、とつあえず、

それが分からぬ間は戦闘に関しては怒らなこようになります……

「…………もし、強いつて分かつたら?」

僕は二ココとほほ笑むピールにそう聞いた。  
するとそれと同時に、

ピエールの後ろからおおまじい程の闇が出現した…よつて見えた。

「その時はそれまでに我慢した分まで怒りますよ?」

先程と変わりずに微笑むピエールの眼に僕は  
顔を引きつりながらも笑うしかなかつた……

……2日後、ルラフュンに戻つた僕たち（スラおとパトリシアを除く）は  
急いでお爺さんの家へと行つた。  
……ちなみに先頭はピエールだ。

前來た時と変わりなく煙を出すお爺さんの家の前まで來た僕たちは、扉を數回ノックノックと叩いた。

……だけじ反応は無かつた。

仕方なく僕は前と同じようにドアノブに手をかけてそれを回した。

……開いた。

少し迷つたが、僕たちはそのまま扉を開けて中に入った。

一階にはお爺さんの姿が無かつた。

階段を上がり、一階に上がってみると、

そこには前見た時と同じ場所で寝ていたお爺さんの姿があつた。

……まさか、4、5日間ずっとここで寝てたわけじゃないよね？

「……お爺さん！ 起きてください……！」

「ル……草を持ってきましたよ……！」

僕はお爺さんを揺すりながらそう言った。

するとお爺さんは突然起き上がった。

「なんと……！ ルラムーン草を持って来ただと……！」

「うん……採るのに苦労したけどね

僕はそつとお爺さんにルラムーン草を手渡した。

「ほほう……これがルラムーン草か！

あっぱれあっぱれ……！」

やつそく実験を開始するとしようつれ――――」

お爺さんはそう言つと、階段を駆け降りて行つた。

今、これがルラムーン草かつて言わなかつた?

……もしかして実物を見たことがなかつたとか無いよね？

僕がブツブツと呟いていると、ピエールがご老体を追いかけてなくて  
も良いんですか？

と言つてきたので、僕が取り敢えず、考えるのをやめて、

一階には大きなツボを見上げながら難しい顔で手元の本を読んでいるお爺さんの姿があつた。

「…………あの～おじいさ

「ええい！ 話しかけるでない！－！」

怒られた。

……これは僕が悪いのかな？

「よーし、今じゃ……！」でルラムーン草を……。

突然お爺さんが声を上げてきた。

……どうやらもうすぐ完成のようだ！

お爺さんはさつき僕が渡したルラムーン草を巨大なツボの中に投げ込んだ。

ブクブクと音をたて始めた大きなツボから先程よりも毒々しい煙が舞い上がる！

それと同時にツボから光の粒のようなものが舞い落ち始めた。  
その粒は時間とともに数を増やしていく、  
しまいにはこの部屋を完全に光で包み込んだ。  
それと同時に僕は気を失った……。

「ふむ……。おかしいの……」

僕が目を覚まして初めに聞こえた声はお爺さんの声だった。

僕はゆっくりと腰を上げて立ち上がり、周りで倒れているペーチエルとボロソング、ホイミンを揺すつて起らした。

「わしの考えでは今の出ルーラといふ古の呪文が  
蘇るはずなんじゃが……」

「……え！？ もしかして失敗したの！？」

「そんな！？ あんなに苦労して手に入れたルラ……草だつたのに……！」

「のうお前さん。呪文が使えるようになつていなか  
ちと試してくれんかのう？」

「……試すつてどんな風にですか？」

「なに、何時も呪文を唱える時と同じ感じじゃ！」

「今回まだ呪文を見たことも使ったこともないと思つから、心の中でルーラ！……と云んでみるとよこじやうひ」

「ふうん。ルーラねえ……。」

「……と言つたが僕何気に呪文の名前聞いたの今回が初めてじゃない！？」

「そうだよね？ 絶対そうだよね！？」

「何をしておる！」

呪文が使えるのみならぬつておるこるが  
早く歸すんじやーーーーーーーー

僕が心の中で訴えていたと、お爺さんが急かすように言つてきた。

「ええつと……『ルーラー!』」

そう呟いた瞬間、僕の体は浮かび上がった！

「おおーーー！ 成功じゃーーー！」

凄い！！！

ルーラーで空を飛ぶ呪文なんだ!!!!  
僕がそう歓喜しているにも関わらず、

体は上へ上へと上がつて行く。

(…………体が軽い！）こんな気持ちのは初めてだ！ もう何も怖くない

僕が心の底からそう思っていた。

しかし体はすごい勢いで上へと飛んで行く。

ドオオオオオオオーン！――――――――――――

突如、何かと何かがぶつかつたような音が部屋に響き渡った。

僕が天井に頭を思いつきりぶつけた音だった。

僕が痛みで床を転げまわった。

「すまんすまん！  
この呪文…ルーラは一度行つた場所に飛ぶことが出来る凄い呪文  
じゃ！」

だが、どうやら屋内では使えないみたいじゃな

「転げまわる僕を憐れむような田で見つめながらお爺さんは言った。  
「こだけの話、僕、殺意を覚えちやつたよ……」

でもすごい呪文だ！！！

これまで行つた場所に行く時、一瞬で行くことができる……もう屋内では絶対に使わないよ

卷之三

スラお達が待つてゐる、町の入口まで軽い足並みで歩いて行つた。  
先頭はピエールだよ。

## 04 (後書き)

……ネタはこの小説を書いつと想つたとき、ついにつけました。  
……カットしよいかと思いますが、折角なので載せました。

……最近メインの小説のほうがスランプ気味です。

こつちは、

実況動画を見ながら書いてるので、詰まることあまり無いので楽です。

……昔買った攻略本さえあれば、実況動画で確認しなくても話のながれがわかるのに……

s.i.d.eリュカ

「……つてことがあって、僕はルーラを使えるようになったよ……！」

「……それはよかったですな

僕はスラおの所へ戻るとさつき、

お爺さんの家であった出来事を一部隠しながら話した。

僕敵にはもつとリアクションが欲しかったんだけど……

「……それでそのルーラって呪文を使ってみるのか？」

「うん！！！　まだ、使ったことないから楽しみだよ……！」

そう。僕はまだルーラなんて使ったことは無い！

……無いんだ……

「リュカ殿……」

ピエールが何か悲しそうな瞳で僕を見つめた。

……やめて！！！　そんな目で僕を見ないで……！

「……それで記念すべき、第一回目の飛ぶ場所は決まつてゐるのか？」

スラおが流れを変えるように話を戻した。

「前から思つてたけどスラおつて、かなり空氣読めるよね？」

「うん！　一回目のラインハットに飛びよ……！」

何処にでも行けると聞いて僕が初めて行きたいと思つたのはラインハットだ！

「…………ラインハットねえ…………。

「そこには何があるのか？」

「うん。

「そこには僕の親友が居るんだ」

「そう。親友が……。

「…………ヘンリー殿ですね？」

ペールが確認するように僕に言つた。

僕はその言葉に何も言わず、ただ頷いた。

「…… 親友ねえ……」

俺にはよく分からぬ物だな……」

スラおは小さくそう呟いた。

……スラおには居なかつたのかな?

「まあ、取りあえず唱えるよ!—!

僕、実は速く飛びたくてうずうずしてんのだ!—!

「そ、そうですね。

よし、全員リュカ殿に集まれ!」

ピールはそう言つて全員を僕の近くに集めた。

……あれ? そういうばこの術、

数人で飛べるの?

……まあやつてみたら分かるよね?

「よし行くぞ!—! ルーラ!—!』

ここに居る全員をラインハットに飛ばすイメージをして呪文を唱えると、

想像通り、僕も含めた全員が光に包まれ、そして空へ飛んだ！！！

そして数秒もしないうちに大きな城下町がある城……ラインハットにたどり着いた。

「す、凄い呪文ですね！！　さすがは古の呪文……」

ラインハットに付いたことに気が付いたピエールは驚くよう言つた。

僕も驚いてるよ。

「……ここがラインハットねえ……。

聞いたほど悪い国じゃなさそつだな……」

スラおは何事も無かつたかのようになつても通りの調子で呟いていた。

……あんな凄いことがあつたのに。

……つて、聞いた話？

「スラおはこの国のことなどをう聞いていたの？」

と言つより、誰から聞いたのかな？

……他のモンスター？

「俺が聞いた話では、國は荒れ果て、路頭者が多く、大人から子供までが物乞いを行いう国……。  
不安を漏らせば即刻太後に処刑される國だと聞いていた。……だが、ただの噂だったようだな……」

「……うんん。

それは本当のことだよ。

この國はつい最近までそんな國だつたんだ

スラおが噂だと勘違いしたのは仕方が無いね。  
今のラインハットは家や道がキチンと整備され、  
全員がきちんとした服を着ていて、  
なによりみんな笑顔で溢れていた。

僕もピエールも驚いたぐらいだよ！

「……それは興味深いな。

どうやってそんな短期間で國を整えたんだ？」

スラおが興味を持つなんて珍しいな……

よし……なら僕達の活躍を話さなくちゃね……！

「この國の太后は実は偽物で、本物は牢獄に閉じ込められていたんだ。

それで僕とヘンリーは正体を暴くべく、

ラーの鏡を探しに神の塔つていう塔に上ったんだ！

あ、ちなみにヘンリーは実はこの国の王子で、

10年前に一緒にモンスターのさらわれ、奴隸にされてたんだよ。

それで……

「…………もつい……。

大体の事は分かった

……ちえ、ここからが僕の活躍する話だつたのに……

つていうか本当に分かったの？

「……今までの太后の行いを偽物が行つたと言い、国に発表したんだろ？」

元凶が偽物で、その偽物が死んだと知れば、国を変えるなど楽だからな」

疑いの眼差しで見つめる僕に気が付いたのか、  
淡々と言つてきた。

……本当にあれだけでそこまで分かるなんて……

「で、リュカ殿、これからヘンリー殿に直接会いに行くのですか？」

「勿論だよーーー！　ピエールも来るよね？」

僕の言葉にピエールは少し困ったような顔をして頷いた。

……モンスターだからとか気にしなくていいの……

「……じゃあ俺はいつも通り馬車で待っている」

スラおはそう言つて町の入口に向かおうとした。  
……やせない！

「ダメだよ！ 今回はスラおも一緒に来るんだよ？」

「……なぜだ？」

「それはスラおどペールの仲が悪いからだよ。  
だからこれからは仲良くなれる様に  
スラおも一緒に行動してもらいう！」

スラおとペールの仲が悪いのは、お互いを知らないからだ。  
だから一緒に町や村を回つたりすれば、少しは仲良くなれるはず……

「……別に俺はマイシと仲なんて悪くないぞ？」

スラおがそう言つて文句を言つてきた。

「でも実際仲が悪いよ？」

まあ、大抵はピエールから怒りはじめるけど、  
スラおの態度もよくない！

戦闘に参加しないのはいいけど、それ以外はキチンとしなきゃね  
！」

スラおもむつとした表情で僕を見ていた。

ふふふ。さすがに戦闘に出ないことを言われたら、  
言い返しにくいみたいだね！

「……わかったよ。一緒に行動すればいいんだろ？」

「そういう事！」

「……私は別に別々に行動してもいいかと……」

それぞれがそう言い、

1人と3匹……ああ、めんどくさい！

4人でラインハット城へ向かつて歩いた。

ちなみにメンバーは僕、ピエール、ホイミン、スラおだ。

ボロンゴはさすがに大きいから、場所で待つてもらう事にした。

……「めんね、ボロンゴ。

06 (前書き)

…… 1Jの回が書いていて一番苦労しました……

それとユニーク1000人突破です……！

私の小説を読んでいただき、有難いことがあります……！

## sideリュカ

僕達はラインハット城へ行つた。  
……ヘンリーに会つたために。

僕達が王座に行くとそこにはヘンリーの弟…デールと大臣が居た。

「どうも… 久しぶり…！」

「やや！ あなたはリュカさんじゃないですか！？」

「ちょっとヘンリーに会いたくなつてね、  
つい来ちゃつたんだ！」

「そうなんですか。

あ！ それと兄からリュカさんの事をいろいろ聞きました

「僕の事？」

「はい。それでリュカさんは伝説の勇者を探しているんですね？  
それでせめてもの恩返しにと  
部下たちに伝説の勇者の事を調べさせていたのですが…  
見つかりませんでした…すいません」

「……」テールが暗い顔で謝つてきた。

「……謝ることなんてないよ！……」

「いいよ……気にしないで！……」

「伝説の勇者がそんなに簡単に見つかるはずがないよ……」

「……やつ置いて貰えると助かります……。」

「でも、武具の情報は入手しました！」

「ホント！？」

「はい！ かつて勇者が使った盾がサラボナという町にあるやつです」

「サラボナか……聞いたことがないな……。」

「……スラおなら知ってるかな？」

「それでサラボナは西の国、ルラフーンの極にあると聞きました」

「ルラフーンの南！？」

「ルラフーンの事を知っているんですか？」

「知ってるつもりもないじゃないよ……。」

「だって、さつきまでそこには居たんだから。」

「……この事はまだ置き、旅立つ前に兄に会つてやつてください

「勿論だよ——」

だつてそのためここに来たんだから——！

「有難う御座います。兄の部屋はこの上です」

そう言つてホールにお別れを言つて僕達は上の階へと上がりつて行つた。  
……この先に悲劇が待つてゐるとは知らずに……

ヘンリーの部屋？りしき前に兵士が立つてゐた。

僕達が近づいていくと兵士が言つてきた。死の言葉を……

「やや——ここはヘンリー様と奥様のお部屋。  
無用なものは……

やつぱりヘンリーの部屋だつたね！

「うん？」

今、奥様がどうとか言つてなかつた？

……言つてなかつた？

言つてなかつた！？

そんな事を考へてゐる僕に兵士は驚いたような声を上げた。

「あつ、貴方様はつ！？」

さあどうかお通りください！……」

兵士はやつて言つて僕の背中を押す。

……ちよつと待つて！

なにか不吉な予感がする……

僕達が扉の先に行くと緑色のおかっぱ頭のよつた髪型をして、高そうな服を着た人……ヘンリーが驚いたような声を上げた。

「ここつはおどりこた！！！ リュカじゃないか！？」

僕はヘンリーよりも右の方を見る。

……左側に見てはいけないようなものがあつた気がしたから……

「ずいぶんとお前の事を探したんだぜ！」

やめて！……その先は聞いちやいけない氣がするんだ！……

「うん。その……。

結婚式に来てもらおうと思つてな」

ふ、ふん。そつなんだ。

デールくんがけつこんしたのかな?

そんな僕に対してもヘンリーは止めの言葉を僕達に言つてきた。

「実は俺、結婚したんだよ！..！」

「……ヘンリーがけつこん？」

ヘンリーがそつと左の方からヒョウヒョウヒョウヒョウと  
茶髪で髪の毛の長い人がこつちに歩いてきた。  
やつぱり彼女は……。

「リュカさま。お久しぶりでござります」

「…………」

女人……マリアさんは僕達に笑顔でそつと走ってきた。  
今はその笑顔が痛いよ……。

「わははは……と、まあそう言つ訳なんだ！」

……クッソー……ヘンリーも、幸せそうに笑いやがつて……！

「まあもしかするとマコアはお前の方を好きだつたのかもしれないけど」

……マリアだつて。……前までは、さん付けだつたのに……。

「まあ貴方つたら……。

リュカ様には私などよつもつとふさわしい女性がきつと見つかりますわ」

……見つからなかつたらずつと一人身か……。

……つていうか僕達の前でいちゃつかないでほしいんだけど……。

「ど、とにかくリュカにあえて本当に良かつた……！  
結婚式には呼べなかつたけど、  
せめて記念品を持つて行ってくれよ」

僕からあふれ出す負の感情に気が付いたのか、  
ヘンリーは話題を変えるように言つていた。  
……本当に昔から話すのは得意みたいだね……

まあ記念品を貰えるんだからそれで怒るのは無にしてあげようか

な？

「昔の俺の部屋覚えてるだろ？  
あそこの中箱に入れてあるからな」

……つまづ取りに行けってことか……。

……勿論相当なものだよね？

「ヘンリー殿とマコア殿、幸せそうでしたね」

前のヘンリーの部屋に向かう途中、  
ピールがそう囁つてきた。

「……そりだね。まさに幸せすぎて死ぬって顔をしてたね……

「……ならなぜお前はうれしそうな顔をしていないんだ？」

スラおが突然そう尋ねてきた。

……別にうれしくないわけじゃないんだけどね……

「うーん……まあ、うれしいけどムカつく！  
そんな感じかな？」

「……どうしてムカつくんだ？　お前はあの女が好きだったのか？」

「別にマリアさん的事はそんな田で見つけなかつたよ」

「……なりどり？？」

……そんなの決まつてるじゃないか！――

「僕より先に結婚したのがムカつく……」

「……ハア？」

スラおが呆れたような顔で僕の方を見た。

……全く、スラおは人間の男の気持ちを分かつていなーいな……。

## 07(前書き)

……なぜかこの話と前の話を書いてのが今までで最も苦しかったです。

やつと次から話が進みます！…！

s.i.d.eリュカ

しばらく城の中を歩きまわると、昔のヘンリーの部屋の前にたどり着いた。

「おお！ 懐かしいな～」

僕はヘンリーの部屋の扉を見ながらそつまく。

「…………どうやら現在は太后様が使用しているそうです……」

僕がまじまじと扉を見ている間に、ピエールが兵士に聞いたらしい。

「…………太后さんが、ね…………」

「…………その太后って、ニセ太后に入れ替わってた奴のことか？」

「…………そうだよ」

僕が短くそう答えるとスラおは何かを感じ取ったのか、  
それ以上は聞いて来なかつた。

……恨んでるわけじゃ無いけど、あまり太后の事は話したくないんだ。

僕が元ヘンリーの部屋の扉を開けると、そこには想像通り、太后さんが居た。

「おお！ そなたは！ あの時は本当に世話になりました」

「…………いえ、[レナード]無沙汰しています」

僕が丁寧語で話すのを見てピエールが驚いていた。

失礼だな…………。

「…………誤つて住むことではないのですが…………」

「ソナタの父親の件……本当に済まなかつた…………」

太后さんは頭を低く下げ、僕に謝つてきた。

「…………太后さんも昔のままじゃないってことだね。」

「…………謝らないでください。」

「…………全く恨んでいないと言つたら嘘になりますが、僕はあなたのことを憎いとか、そんな感情は抱いていません…………。」

「今の貴方は国の為、国民のために頑張っています！」

「それは国やデール王を見たら分かります。」

……そんな貴方を恨んだりしたら、  
天国の父が怒ってしまいますよ。……」

僕は笑顔で太后さんにそう言つた。

……太后さんの目から涙が出ているように見えた気がした。

「……言い訳になつてしまふかもしれんが、  
なぜあんなことをしたのか、  
今となつてはわらわにも分からぬ……」

……今の太后さんならもう大丈夫だね！

「太后さん！ これからもテール王とヘンリーにマリアさん……  
それと国民を大切にしてくださいね！」

「……ああ！ 誓おう！  
わらわは家族のため、国のために、……そして国民のために全てを  
尽くすと…」

太后さんは真剣な表情でそう言つてくれた。  
……もうこの国は大丈夫だよ。父さん……。

「それでヘンリーが昔使つていた宝箱つてこの奥にありますか？」

僕は本来の目的であるお祝い品が入っていると言われている  
宝箱の所在を尋ねた。

「ああ。それならこの奥の部屋じゃ」

「そうですか。分かりました！」

太后さんにそう返すと僕は更に奥の部屋へと足を運んだ。

「……わらわは少々散歩に出てくる。

その間にゆっくりしていくが良い」

太后さんはそう言って部屋を出でいった。

……氣を使わなくともいいのに……。

奥の部屋の扉を開けると、

そこは十数年前と変わらない光景がそこにあった。

「……宝箱一個置いてあるだけにしては掃除されているな……」

スラおは部屋を見渡しながらそつぱん。  
……よく氣づくね。

そして僕達はヘンリーの宝箱の前に立つ。

……さて、どんな豪勢なものが入っているのかな！

僕は勢い良く宝箱を開ける！！！

……しかし宝箱は空っぽだつた。

……………ビウニウ」とへ。

「コウカ殿……これは一体……？」

ピエールがそう言って声を上げる。

……フツフツフ。

ヘンリーめ……そこまで僕を馬鹿にするか……。

今すぐヘンリーの所に行つて顔面にバギをぶつ放してやるつかな。

それともヘンリーの顔面に全力パンチを100発……

「……おいー 宝箱の底になにか文字が刻んであるぞ？」

僕がこれからヘンリーをどんな目に會わそつか考へていると、

スラをが宝箱に乗つて言つてきた。

……そこに文字？ どれどれ……。

『リュカ。お前に直接話すのは照れくさいからここに書き残してお

く。

お前の親父さんのこととは今でも一寸だつて忘れたことはない。  
あの奴隸の日々に俺が生き残れたのはいつか  
お前に借りを返さなくてはと……

そのために頑張れたからだと思つていて。  
伝説の勇者を探すというお前の目的は

俺の力など、とでも役に立ちそうにないものだが……  
この国を守り、人々を見守つてゆくことがやがて  
お前の助けになるんじやないかと思う。

リュカ、お前はいつまでも俺の子分……じゃなかつた、  
友達だぜ。

ヘンリー』

僕は静かに宝箱を閉じた。

「……なんて書いてあつたのですか？」

ピエールは宝箱のそこに書いてあつた文字が気になつて僕に尋ねてきた。

「この文字を読んだのは僕だけだ。

「……まあ、大したことは書かれたなかつたよ

「……そなんですか？」

「……Iの文は僕の心のなかにあればいい。

「さて、宝箱には何も入ってなかつたでヘンリーに文句を言つて行ひ——！」

「え？ 宝箱に結婚式の記念品なんて入つてなかつたつて？ わつはつは！」

お前は相変わらず騙されやすい奴だな」

「ヘンリーもいい加減そういうのやめたほうがいいよー。」

僕とヘンリーはお互にからかい、語り合つ。

……次に会えるのはいつだか分からぬから……。

「じゃあ今度こそ本当に渡すよ。

」の記念オルゴールを

ヘンリーはさういつと綺麗に細工されたオルゴールを僕に渡してきました。

「……実はフタのところに宝石を埋め込むはずだったんだけど、職人が見つからなくて……」

「……職人ぐらい探しなよ……」

「大事な結婚式だつたんでしょ？」

「それが国中の国民達が大騒ぎしてな。

結婚日を変えるわけにはいかなかつたんだよ。……」

僕とヘンリーは日が暮れるまでずっと話続け、ヘンリーと別れた後はルーラでルラフェンに飛んで、宿で眠つた。

遅くなつて申し訳ござりません！

最近色々あつて、動画を見ながら書かなくてはいけないこの小説を書く時間があまりありません。

……貰った攻略本さえあればそんな事しなくてもいいのに……

それと更新出来なかつたもう一つの理由が……

なんというか、この前のヘンリーの話のせいで、

この小説を書く気力がほとんど無くなつてしまつたのが大きかったかも

しません……

今は前ほどでは無いですから大丈夫と思います。

……なぜヘンリーの話がこれほど辛かつたのでしょうか？

## sideリュカ

ルラフーンの南を半口ほど歩き続けると小さな小屋のような物があるのが見えた。

「ちょうどいい。今日はこの小屋で休ませて貰おう…」

「……そうですね。さすがに私も疲れました……」

僕がそう言つといつも疲れを見せないピエールが少しだけ疲れたような声でそう返してきた。

……最近少しだけ野生の魔物が強くなってきたからね。さすがに前衛三人と回復役一人じゃちょっとキツイ。  
……後衛で戦闘ができる人が一人でもいればかなり楽になるんだけどね……

「うーん！　いい場所だったね！――！」

昨日はほんとに良く眠れたよ！

「はい！ モンスターである私やホイミン、ボロンゴを持て成して  
るれるなんて  
本当に優しい人達でした！」

そう！ 小屋の人達はピエール達も一緒に泊めてくれたんだ！  
本当にいい人達だったな……  
だから……

「スラおも一緒に泊まればよかったのに……」

スラおは何時もと同じで外でパトシリアの馬車の中で夜を過ごした  
んだ。

「……俺は人間が嫌いだという事は初めに言つただろ？」

「でも、小屋の人達は本当に親切な方でしたよ。  
……きっと、ひねくれ者の貴方でも優しく出迎えてくれたと思いま  
すよ」

「……優しいとかは関係ないな。俺はただ純粹に人間が嫌いなだけ  
だ」

……それを言われたらなんとも言えないよ。

side out

「ピールーーー！」

暗い洞窟の中、ピールに何者かによるひっかき攻撃が繰り出される。

ピールは僕の声でその存在に気が付き、ギリギリでそれを剣を横にして防ぐ。

何者…リビングデッドはひっかきが剣で防がれたにも関わらずそのまま体重を乗せて剣を押し返えそうとする。

「クツツーーー！」

それに対してもピエールは剣を持つ手に全力で力を込める。押し返されそうになつて、劍を逆に押し返す。

そして思いつきり剣を薙ぎ払い、リビングデットがよろめきを見せた瞬間、

胸元に致命傷となる切り下ろしを繰り出す。

リビングデットが完全に息絶えたのを確認するとピエールは一瞬だけ息を大きく吐く。

そしてすぐに他の者へ助太刀に向かおうとするが、各々戦闘が終わつたのがよく見えた。

ボロンゴの近くにはボロンゴと同じ姿をしたキラー・パンサー…ドロヌーバという

魔物が『モシャス』によってボロンゴと同じ姿に化けたモンスターが消えていくのが見えた。

そしてリュカとは言ひつと……

足元に緑色のコウモリのようなモンスター…ヘビ…こいつもりが数体足元に転がっていた。

……恐らく一人で数体を相手にしたのである。

ホイミンは、戦闘が終わつたのが分かるとゆらゆらと体を揺らしながら

馬車から姿を現し、まず一番ダメージを受けているであろうリュカの元へと急いだ。

リュカの元へ着くとホイミンは田を開じて魔力を集中させる。

……ホイミンは『ホイミ』を唱え、リュカの体の傷を癒す。

リュカが終わつた後は、他の傷ついている者の所へと向かい、

先程と同じように『ホイミ』を使って傷を塞いだ。

そのような戦闘を繰り返す事數十分、  
リュカ達は洞ぐつの出口へとたどり着く。

### s.i.d.eリュカ

「う~ん！ 外だ！――！」

やつぱり外の空気はおいしいな！

洞ぐつは暗くてジメジメしてたからね……

外は最高！――！

「……結構時間が掛かつたな。

……そんなに迷つようなダンジョンじゃ無かつた筈なんだが」

馬車の中からスラおがひょいと顔を出してそう言つてきた。

……べ、別に迷つてたわけじゃないし……！

歩いている途中に魔物が襲つてくるせいで、  
どつちに行つたかを忘れちゃつただけだし……！

「……確かにリュカ殿のせいで時間が掛かつたのは認める。  
だが、貴方が戦闘に参加しないのも攻略に時間が掛かつた原因の  
一つなんでは？」

「……言つただろ？ 僕は戦闘には参加するつもりは無いと。

……邪魔だと思つなら、野生にでも返すんだな」

「……一人の仲が悪いのは相変わらずだね……。」

……まあ、仲が悪いと言つか、ピエールがスラおに突つかかつて  
つて感じかな？

「とにかく今はサラボナに向かおう……ここからもう少ししみたいだ  
からね！」

僕がそう言つとピエールは渋々スラおとの喧嘩を辞めてくれた。

……ピエールは素直なんだけど、  
スラおとの相性だけは悪いのかな……？

「わん わん！」

サラボナの町に入ると突然僕の方に向かつて吠える犬の声が聞こえてきた。

「誰か！ お願いです！ その犬を捕まえて下さいー。」

前方にこちらに向かつて走つて来る犬を姿と、必死に叫ぶ女の人の姿が見えて来た。

「つおつとー？」

僕は犬を逃がさないように道を塞いだけど、犬は突然僕に飛びついて來た。

「はあ、はあ……。

「ごめんなさい。 この子が突然走り出して……」

女人人は僕の元へ来るといつと頭を下げて謝つてきた。

「いえいえ、大丈夫ですよ！」

「……本当にごめんなさい。……さあいらっしゃい。リリアン！」

女人人はもう一度頭を下げる、犬……リリアンという犬の名を呼んだ。

……だけどリリアンは僕の元を離れてくれない。

「まあっ！？ リリアンが私以外の人にはくなんて初めてですか？」

「そうなんですか？」

女人人はそう言ひとじと僕の眼を見つめてきた。

……へへへ、ちょっと照れる／＼

「…………あら嫌だわ。私ったらお名前を聞かずにボーッとして。  
…………お名前をお尋ねしてもよろしでしょうか？」

「そんにかしこちらなくともいいですよ？ 僕はリュカと言いま  
す」

「リュカさんと仰るのですね。 先程は本当にごめんなさい。  
またお会い出来たらきっとお礼をしますわ。

さあリリアン！ 行くわよ

女の人はそう言つと駆け足で町の奥へと走つて行つた。  
犬と一緒に……。

ヘンリーの話が終わったので思った以上にタイピングが進みました！

……別に作者はヘンリーが嫌いなわけじゃないんですけどね。

## sideリュカ

とりあえず町中を回つてみたけど余り情報を得ることは出来なかつた。

……なぜなら……。

「……余り人が居なかつたね」

そう、町には思つた以上に人が居なかつた。居るのは町の住民らしき人達だつた。

「酒場にも人が居ないつて……」

「……やはりルドマンさんの家で行われる重大発表と言うものが関係しているんでしょ」

……多分ピエールの言つ通りだと思つ。

町の人達に何かを尋ねようとしたら決まって、

「ルドマンさんのお屋敷はあちらです」と返される。

「……行つてみたらいいだろ? そつすれば全て分かる」

僕達の後ろを小さい体でぴょんぴょんと飛び跳ねて付いてくるスラ  
おがそう呟いた。

……ちなみに入らおは前の約束通り、  
町の探索には出来るだけ付いてきてもらう事になった。  
メンバーは僕、ピール、スラお、そしてホイミンだ。  
……やっぱりあまりボロンゴを町の中には入れることには出来ない。  
一様ボロンゴは人を襲う魔物として有名だから、町に入れさせてく  
れない。

……ボロンゴはそんなに悪い魔物じゃないのに……

とにかくスラおの言つとおりかな? とりあえずルドマンさんの屋  
敷に向かおう!

「……、じいじがルドマンさん……ルドマン様のお屋敷ー!?

「……金持ちだからって様付けするな」

「……も、もう、冗談だつてば、冗談!」

「……でも確かに私達が入るのには躊躇してしまつような大きな屋

敷ですね……」

ピエールがそう言つのにも仕方が無かつた。

ルドマン様……ルドマンさんのお屋敷はとても綺麗で大きかつた……

「……やはり魔物である俺達はここには入らない方がいいな」

「……そうですね。今日は重大発表があると言われているので人も集まっているでしょう。

私達は屋敷の外で待機することにします」

「ちょー!? いきなりそんなこと言われても困るつて!?

「……あ!? そんなこと考へていらうちにみんなが向こうに行つち  
やんた……。

仕方がない……。僕一人で入るか。

屋敷の入口の扉の前まで歩き、  
どうやつて扉を開ければ失礼じゃないか考へていると  
突然扉が開いた。

「いらっしゃいませ。ここはルドマン様の屋敷でござります。  
あなたもフローラお嬢様とのご結婚をお望みですか?」

「はいー!? それはどういう事で……」

「でもさうおひがひお待くべだれ

僕が何かを言いかけようとするメイドさんはそれを躊躇つて、屋敷の向こうを指した。

「だ、だから僕は結婚をしにきたわけじや……

「ではおひがひお待くべだれ

僕は結婚しに来たわけじやないとメイドさんはそうとしたけど、メイドさんはまたもやそれを遮つて、向こう側を指した。

……ハア、仕方がない。とりあえず向こう側に行つてみるか。  
僕はメイドさんが指した方にゆっくりと向かつて行つた。

メイドさんが指した先には数人の男の人人が扉の前の椅子に座っていた。

……何をしているんだろう？ 僕が何をしてるか尋ねようとしたその瞬間！

「それではお時間となりましたので応接間へお通しいたします。どうぞお入りください」

いつの間にか僕の後ろに居たメイドさんがそう告げてきた。

僕は一瞬驚きで声を上げようとしたが、今までの戦闘の経験がそれを防いでくれた。

……ふう、今までいろんな経験をしてきてよかつた。

扉の向こうへと歩いて行く男の人達にとりあえず僕は付いて行つた。扉の向こうには広い部屋があり、大きな机を挟むように椅子が置いてあり、

向こうの椅子には変な髪型のおじさんが座つていた。  
(悪魔のような髪型をしてるな……)

僕はひつそりとそう思いながらも男の人達が座り始めた椅子の方へ腰かけた。

僕達が全員席に着いたのを変な髪型のおじさんが確認すると、おじさんは突然話しお出した。

「皆さんよつこそー 私がこの家の主人ルドマンです

……危なかつた！　変な髪型と口にしないで本当に良かつた……

「さて。本日こいつしてお集まり頂いたのはわが娘フローラの結婚相手を決めるため。

しかしただの男にかわいいフローラを嫁に寄りつとは思わんのだ。そこで条件を聞いてほしい。

古い言い伝えによるところの大陸のどいかに2つの不思議な指輪があるらしいのだ。

炎のリング、水のリングと呼ばれ、身に付けた者に幸福をもたらすとか……。

もしもこの一つのリングを手に入れ、

娘のと結婚指輪に出来たなら喜んで結婚を認めよ！」

……やつぱり僕がここに居るのは場違いみたいだ。

僕は別に結婚をしに来たわけじゃないしね。

……話が終わつたらこいつそり帰るとするか。

僕がそう思つた瞬間、ルドマンさんが衝撃の言葉を口にした。

「ああ。それと我が家の婿にはその証として家宝の盾を授けるつもりだ」

なん……だと…？　まさかその盾と言つのは天空の盾の事じゃないか…？

……………え、どうしたの…？

「では……」「待つてください……！」

ルドマンさんの言葉に女性の声が被さった。  
…………うん？ この声はどこかで…………？

「フローラー 部屋で待つていろよ」  
「ううう？」

「お父様。私は今までずっとお父様の仰る通りにしてきました。  
でも夫となる人だけは自分で決めたいのです！」

…………皆さん！

炎のリングは溶岩の流れる危険な洞窟にあると聞いたことがあります。

どうかお願いです！ 私などのために危ない事をしないでください

い

…………あ！？ 思い出した！……あの人は町の入口で犬と一緒に居た人だ！

へえ～…………フローラさんていうのか。

フローラさんが何か言っていた間はずっと  
フローラさんと会ったことがあるような…………と、  
考えていたので全然話を聞いていなかったよ。

「…………あらっ？ 貴方はほさつきの…………。

それでは貴方も私の結婚相手に？ まあ…………」

「いえ、それが実は………… 「なんだフローラ、知り合いなのか？」

「…………」

僕の言葉にルドマンさんが被せて言つてきた。

…………！」この人は僕の話を全然聞いてくれないな…………。

ルドマンさんは僕の足元から頭までジツと見つめて

「…………なかなか頼りになりそうな若者だが…………」と、

誰にも聞こえないように咳いていた。

まあ僕には聞こえたんだけどね。

「ゴホン！ とにかくフローラと結婚できるのは

2つのリングを持つて来た者だけだ」

ルドマンさんは最後にこう言つてフローラさんを連れて一階に上がり  
つて行つた。

ルドマンさんが居なくなつて気が抜けたのか、男の人の中の一人が  
ため息を付いて言つた。

「はあ…………。ルドマンさんも大変な条件を出してきたな

そう言うと男の人を始め、僕以外の人達がトコトコと屋敷を後にした。

……僕もみんなの所に戻るか。

「……という事があつたんだよ」

皆の元に戻つて僕は屋敷の中であつたことをみんなに話した。

「……リュカ殿も大変な物に巻き込まれましたね。

よりもよつて、結婚ですか……。

天空の盾が欲しいだけで結婚するのはよろしくないですが、  
そうしないと天空の勇者を探せないのも事実」

僕とペエールは腕を組んでこれからどうするかを悩んだ。

……

まあ、結局考えはまとまらなかつた。

「 とりあえずその炎のリングと

水のリングと言うものを手に入れた方がいいだろう。

……誰かに捕られてからじゃ、遅いぞ？」「

「 ……確かにその通りだね。じゃあまずリングを手に入れよう！

考えるのはそれからだ！」

「 ……確かに今はそれが最善です。

……しかしリュカ殿はどこにリングがあるのかご存じなのですか？

今の時点じゃ、この大陸の何処かにあるとしか存じていませんが

「 ……」

「 ……まあ？」

「 ……」

「 ……」

「 ……」

僕とピールの間になんとも言えない空気が流れ始める。

「 さうだ！ スラおなら何か知ってるんじゃない！？」

「ほら！ 戦闘に参加しない代わりに情報は提供するとか言ってたよねー？」

「 ……リュカ殿。さすがにそれは横暴というか……」

「……悪いが炎のリング、水のリングの名を聞いたのは今まで初めてだ」「

……やっぱりスラおでも知らないか。

「……だが、それぞれのリングがありそうな場所なら知っている」

「「えつー?」「

スラおの衝撃の言葉に僕とピールは間抜けな声を上げてた。

「死の火山、滝の洞窟と言われていたはずだ。

……どうだ？ それぞれのリングがありそうな名前だろ？」「

「……名だけで判断するのはどうかと思いませんが、

今はそれしか手掛かりがありません……。

……それでその場所が何処にあるかは存していますか？」

「……まあ、一様な

……結局、またスラお頼りだけどとりあえず次に向かう場所は決まつた！



すいませんがひとつアンケートを取りたいと思います！

それはピールが男か女かについてです！

作者のピールはどちらにも取れるよつにしているんですが、中途半端は良くないと思いアンケートを取ることにしました。

……よく見るドラマの一次小説ではピールが女の子であることが多いので、

皆さんは女の子のほうが多いのかな？ と、突然思いました。

どちらでも話しの結末は変わらないので軽い気持ちで感想に書いて貢えると助かります。

騎士らしい頼りになる男、ピールか、

騎士らしいが女の子っぽいこともある、ピール。

……皆さんはどちらがいいでしょうか？

……ちなみに「」意見がなかつた場合はピールは男になります。

一様期限は私が次の話を投稿するまでです。

……結果が圧倒的な場合は25日ぐらいで締め切ります。

僅かな差の場合はどうえず27日くらいまで様子をみる」とします。

感想、または評価をおねがいします！！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9575w/>

---

ドラゴンクエストV 天空のスライム？

2011年11月23日15時53分発行